



50

号記念エッセイ

『非文字資料研究センター News Letter』

50号を迎えて

—改めて、非文字資料・非文字研究を考える—

内田 青蔵 (非文字資料研究センター 研究員)

●はじめに

早いもので神奈川大学日本常民文化研究所の附置機関として設置された非文字資料研究センター（以下、センターと記す）発行の『非文字資料研究センター News Letter』（以下、『News Letter』と記す）が50号を迎えるという。センターでは、こうした定期的な刊行物を数種発行しているが、その中でもこの『News Letter』は、筆者も活動報告などを何度か掲載させていただいたように、毎回それぞれ複数ある研究班の具体的な研究状況を知ることができる貴重な機関誌といえる。

こうした活動報告を目的とする機関誌は、多くの機関でも発行しているが、管見の限り、『News Letter』はその報告内容が豊富で、しかも読み応えのある充実したひとつといえる。こうした質の高さを発行以来維持しているのは、まさしく、この『News Letter』が明快な使命のもとで発行されているからといえる。すなわち、我田引水になるが、筆者がセンター長を務めさせていただいた時を振り返ると、当時のセンターの最も重要な主要課題は、如何にこのセンターの存在を内外に知らせ、“非文字研究”という新領域の研究を普及させるかということに尽きていた。学内の教職員の方々はもちろんのこと、学外で多くの研究者とお会いしてセンターの存在とその役割についてお話しするたびに、幾度も“非文字研究”がどのようなものなのかの説明が求められた。

そんな経験の中で、拙い説明を補ってくれたのが、この『News Letter』だった。これをお渡しし、掲載されている具体的な活動内容から研究領域の理解とともに研究の意義への賛同を得た記憶もある。その意味では、この『News Letter』は、まだまだセンターの存在とともに非文字研究を国内外にアピールするためにも、その重要度は変わらないであろうし、より魅力を増すことにより多くの方々により深い理解を得られることになるであろう。

●非文字研究について

『News Letter』50号という節目を迎える中で、センターに関わってきたひとりとして、より一層のセンターの発展を願うばかりである。そのためには、非文字研

究の普及と発展のため、所員たちを中心に一層の研究成果の積み重ねが求められることになるであろう。

ところで、この非文字研究という研究領域は、2003年に文部科学省の21世紀COEプログラムに「人類文化研究のための非文字資料の体系化」と題して採択されたものに基づくものである。文部科学省からの研究資金の提供が終了した後、本学ではこの新研究領域の世界的中心的研究拠点としてセンターを設置し、今日に至っていることはよく知られるところである。ただ、筆者は、センターが開設された後に本校に勤務したこともあり、COEプログラムでめざしていた非文字資料の体系化については、深く議論した経験がない。そこで、これを機に研究の出発点に立ち返り、改めて、先人たちの考えていた非文字資料とそれを対象とした非文字研究について振り返ってみたい。

いま手元に、2006年に発行されたCOEプログラム研究期間の中で行われた『第1回国際シンポジウム 非文字資料とはなにか—人類文化の記憶と記録』（神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議）がある。これをもとに初期にイメージされていた非文字資料とその研究の様子を探ってみよう。

本報告書を見る限り、明確な非文字資料の定義は記されていない。しかし、「趣旨」によれば、人間の諸活動やその結果は「文字に記録されたもの」だけではないとし、「音声・図像・写真・映像の形で記録され、道具・建築物のように造形化され、匂い・味覚など人間の感性や身振りは身体に刻まれ、自然と人間の交渉史は土地景観として表れる」と具体的に文字以外の記録や



図版 『第1回国際シンポジウム 非文字資料とはなにか—人類文化の記憶と記録』（神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議2006年）表紙

造形物を挙げ、「文字に表現されない人間の観念・知識・行為は幅広い」ものであるとし、こうしたものを「非文字資料」と称していることが読み取れる。まさに、文字通り、文字以外で記録され、また、表現されているものすべてを非文字資料と称しているといえる。

一方、非文字資料の多種多様な存在を指摘しつつも、COE プログラムで扱う非文字資料は「①図像、②身体技法・感性、③環境と景観」の3分野であり、これらの資料化と分析方法の開発をめざしていることが述べられている。この3分野に特化した研究姿勢は、センターの研究領域として受け継がれ、現在行われている複数の研究テーマが大別するとこれらの3分野に含まれる理由がここにあることがわかる。

さて、この報告書を読み返すと、この非文字資料に関する報告の中で、最もショッキングで興味深かったのがフランス・リヨン第3大学教授のアラン・マルク・リュの発言であった。すなわち、リュによれば「非文字資料は、全資料の90%」を占めており、その全資料には「近代以前の社会慣行や技術、ポスト工業化社会の大衆文化、音楽、テレビ、映画、ニュースなど多種多様のものがこれに含まれる」と述べているのである。言い換えれば、われわれの歴史や文化についての記述は、実はわずか10%の文字資料を中心に解き明かされているにすぎず、いまだ利用されていない資料が大多数を占めているということの意味するのである。この発言からだけでも、われわれがすっかり見落としていた非文字資料の存在とその利用が求められるのは誰でも理解できるだろう。

ただ、では何故、これまでわれわれはこの非文字資料を研究資料として積極的に利用してこなかったのだろうか、という素朴な疑問を抱く。この点は、実は利用しなかったのではなく、利用できなかったということが、報告されている研究状況からうかがうことができる。

例えば、原信田氏は、非文字として絵画資料を用いた研究を報告している。そこでは、絵画は「見えないものを見せてしまう」得意技を持っているとし、具体的に題材として扱った『名所江戸百景』（1856 - 58年）について、江戸の名所を百景描くという試みとして完成したものの、その構図には「近景に、その場所を指し示すあるいは象徴するものを、遠景に自分たちの関心の対象を描く」という広重の独自の手法が存在しているという。言い換えれば、広重の描いた浮世絵には、実在の名所を描いたものではあるものの、実際に存在するものとならないものが同時に描かれているということになる。

そのため、仮に『名所江戸百景』に真実の風景が描かれているものとしてこの浮世絵を資料にした場合、それは真実ではないと批判されることになる。当然だが、描かれた内容の真偽は、文字史資料の場合と同様に検証して初めて使用できるように、非文字資料の場合でも真偽の検証が必要となる。真実の風景を求める研究では、当然、この『名所江戸百景』は使えない資料ということに

なる。一方、仮に広重の作風に関する研究では、『名所江戸百景』は貴重な資料となり得ることは明らかであり、ここに非文字資料の複雑で厄介な多義性が確認できるのである。

また、非文字資料として写真を研究対象とした報告も見られる。写真は、絵画と比べるとまさしく真実を語るものと考えられ、研究資料としての価値は絵画よりも高いように思われる。しかしながら写真であっても、その制作年代や製作者やモデル、さらには写真を見る側のまなざしや意図により必ずしも真実とは限らないものもあることが述べられている。

このように様々な非文字資料があっても、それを史資料として使用する場合は、その内容の真偽を検証する必要がある。しかしながら、こうした非文字資料の真偽の検証の方法やそうした研究の存在はあまり知られていないように思われる。今後、非文字研究を進めていくためには、こうした非文字資料を用いる研究の方法論の蓄積もまた必要なのである。なお、『名所江戸百景』に関しては、魅力的な作品の解明にあたって作者である広重研究が様々行われている。こうした緻密な研究成果を経て、初めて作品は史資料として使用可能になっているのである。

●むすびにかえて

センターでは、COEプロジェクトで着手された非文字資料としての『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』の刊行を継続してきた。絵画資料に描かれている人物や建物など視覚的に確認できるものの細部に注目し、それらの名称や役割などを解説し、また、時代の変化の中での移り変わりも理解することができることをめざした。こうした絵引の製作を発展させ、『日本近世・近代生活絵引』、『東アジア生活絵引』、さらには『18世紀ヨーロッパ生活絵引』などは、まさにセンターならではの研究成果といえるであろう。また、近年の非文字資料としての戦時期の紙芝居を購入・所蔵したこと、加えて、それらをもとにした研究も貴重な研究成果といえる。

一方、こうした非文字資料の発見と整理とともに、直接非文字資料を扱ったものではないが、これまでの研究成果に非文字資料を加えることで新たな知見を見いだすという研究も盛んに行われている。こうした研究も、非文字資料の価値の発見であり、地味ではあるが非文字研究として価値あるものといえるであろう。

いずれにせよ、まだ様々な課題を抱える研究領域であり、センターであるが、非文字資料の発見とともに非文字研究の方法論を意識した研究などの成果とともにセンターの益々の発展を期待したい。